

シオン通信

大宮シオン・ルーテル教会 礼拝説教集

2006 年 10 月 第4号

日本ルーテル教団

大宮シオン・ルーテル教会

〒331-0814

さいたま市北区東大成町 1-229

phone/fax : 048-663-0215

<http://www.eotown.com/O1church/>

もうすぐ紅葉の時期ですね

大宮シオン・ルーテル教会

梁 熙 梅(やん・ひめ)

あっという間に9月が過ぎてしまいました。もう少し暑い日が続くのかと思っていたのに、すぐ秋になってしまいました。今年の夏は来るのも遅かったけれど、去るのも早く、嬉しいやらもう一方では寂しい思いです。このような季節の変わり目を迎えて、皆さんが神さまの御守りの中でお過ごしのことと信じております。

大宮教会では9月より水曜夕礼拝を始めました。毎週の水曜日の夕方7時に集まり、みことばに耳を傾けることに、日曜日とはまた異なる雰囲気を感じています。夜の静けさの中で聞くみことばですから、同じみ言葉なのに違った感じで受け止められるのです。皆さんも、どうぞ、私たちの教会の近くまでいらっしゃったときには自由にお立ち寄り下さい。

10月から始まる英語学校の二学期の受付を9月に行いましたが、一学期より生徒の数が少し増えたスタートになりそうです。近所の方々が英語を学ぶチャンスを通してみ言葉に触れる機会となることを、祈っています。

10月9日には北海道の旭川教会で全国伝道フォーラムが開かれ、当教会からわたしを含めて三名が参加します。旭川教会は今年新しく建て直し、新しい宣教ヴィジョンを立てています。この旅、全国の教会が旭川教会へ集まることが出来ることを嬉しく思い、楽しみにしています。よき交わりと学びのときとなることでしょう。

夏が短かった分秋が長くなることでしょう。彩る季節を私たちにくださった神さまの恵みをこの季節にたくさんいただいて、この秋もみ言葉にひとまわり肥えた者になりたいです。

【ワンポイント知識】 ミクタム

詩編 16、56～60 編の文頭に書かれていて、その正確な意味は不明となっていますが、語源を辿って「黄金の宝」と推測されてきた言葉です。最近「贖罪の詩」「隠れた祈り」とも解かれています(『詩編の思想と信仰Ⅰ』月本昭男、新教)。8月に行なわれた関東地区サマーキャンプに招かれました小阪忠さんが所属しているミッショングループの名前も「ミクタム」と呼ばれる団体でした。このように、詩編には未だに意味がはっきりしない言葉もそのまま使われていますが、それを辿っていくのも聖書を楽しむ一つの方法でしょう。大宮教会では毎週水曜日に詩編からみことばを聞いています。旧約聖書の中で、特に文学的にも優れている作品に深く触れられることは、神さまの恵みです。

聖書のみことば

イザヤ 35 章 1-3 節

荒れ野よ、荒れ地よ、喜び躍れ、
砂漠よ、喜び、花を咲かせよ野ばらの花を一面に咲かせよ。
花を咲かせ、大いに喜んで、声をあげよ。
砂漠はレバノンの栄光を与えられ、カルメルとシャロンの輝きに飾られる。
人々は主の栄光と我らの神の輝きを見る。

弱った手に力を込め
よろめく膝を強くせよ。

ヤコブの手紙 1 章 2-18 節

わたしの兄弟たち、いろいろな試練に出会うときは、この上ない喜びと思いなさい。信仰が試されることで忍耐が生じると、あなたがたは知っています。あくまでも忍耐しなさい。そうすれば、完全で申し分なく、何一つ欠けたところのない人になります。あなたがたの中で知恵の欠けている人がいれば、だれにでも惜しみなくとがめだてしないでお与えになる神に願いなさい。そうすれば、与えられます。いささかも疑わず、信仰をもって願いなさい。疑う者は、風に吹かれて揺れ動く海の波に似ています。そういう人は、主から何かいただけるとってはなりません。心が定まらず、生き方全体に安定を欠く人です。貧しい兄弟は、自分が高められることを誇りに思いなさい。また、富んでいる者は、自分が低くされることを誇りに思いなさい。富んでいる者は草花のように滅び去るからです。日が昇り熱風が吹きつけると、草は枯れ、花は散り、その美しさは失せてしまいます。同じように、富んでいる者も、人生の半ばで消えうせるのです。

試練を耐え忍ぶ人は幸いです。その人は適格者と認められ、神を愛する人々に約束された命の冠をいただくからです。誘惑に遭うとき、だれも、「神に誘惑されている」と言ってはなりません。神は、悪の誘惑を受けるような方ではなく、また、御自分でも人を誘惑したりなさらないからです。むしろ、人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆されて、誘惑に陥るのです。そして、欲望ははらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。わたしの愛する兄弟たち、思い違いをしてはいけません。良い贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である御父から来るのです。御父には、移り変わりも、天体の動きにつれて生ずる陰もありません。御父は、御心のままに、真理の言葉によってわたしたちを生んでくださいました。それは、わたしたちを、いわば造られたものの初穂となさるためです。

マルコによる福音書 7 章 24-30 節

イエスはそこを立ち去って、ティルスの方角に行かれた。ある家に入り、だれにも知られたくないと思っておられたが、人々に気づかれてしまった。汚れた霊に取りつかれた幼い娘を持つ女が、すぐにイエスのことを聞きつけ、来てその足もとにひれ伏した。女はギリシア人でシリア・フェニキアの生まれであったが、娘から悪霊を追い出してくださいと頼んだ。イエスは言われた。「まず、子供たちに十分食べさせなければならない。子供たちのパンを取って、小犬にやってはいけません。」ところが、女は答えて言った。「主よ、しかし、食卓の下の小犬も、子供のパン屑はいただきます。」そこで、イエスは言われた。「それほど言うなら、よろしい。家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘からもう出てしまっ

た。」女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝ており、悪霊は出てしまっていた。

説 教

『砂漠に咲く花』

今日は関東地区の交換説教と言うことで皆さんと礼拝を守ることができましたこ

とを嬉しく思っています。まだ神学生だった頃、関東婦人の集いが六本木教会で開かれた時にここで説教させていただいた以来です。

今日は一人の母親が病気にかかっている子どもを病気から救うためにイエスさまに一所懸命訴えているところが、皆さんとわたしが分かち合う福音書の日課となっています。この頃の世界の状況から考えるとき、なんと愛おしい姿なのかと思いつながら説教の準備をしていました。

自分が産んだ子どもを虐待してしまう現実やまだ小学生の子どもたちが自分の背丈くらいの銃を持って戦争の場へ生かされている現実を前にしているからです。そして、大勢の子どもたちが今も武力の下でのちを落としている現実を迎えているわたしたちに、今日のこの物語はどのように理解されていくべきだろうかと、考えさせられました。

今日の福音書の母親はユダヤ人ではなく、ギリシア人で、シリア・フェニキアの出身です。というのは、ユダヤ人ではない彼女がユダヤ人である男性の前に積極的に近づいていくことは、当時のイスラエルの社会では許されない行動でした。イスラエルの中では、ユダヤ人＝ユダヤ教ですから、宗教が異なるということで国が違う異邦人を偏見的な目で見っていました。ですから、彼女がイエスさまの前に進み出て願いを言うことは、ユダヤの社会の中にはられている異邦人に対するレッテルを無

視した、非常識な行動でした。

これだけではなく、彼女はもう一つユダヤの慣習を破っています。家の中の問題を外へ持ち出す時の役割は男性が担うべきことでありました。何週間前に聞きました箇所ですが、マルコ 5:21 から書かれているヤイロという会堂長が娘の病気を癒すためにイエスさまのところに來ている話からもわかりますように、家の中のことを外へ持ち出すときの役割は男性が担うべきことでありました。

このようなイスラエルの慣習からみると、この母親は、重ねてやってはいけないことをやっているのです。ユダヤ人の男性の前に異邦人の女性が進み出て、家庭内の問題を打ち出しているこのことは、イスラエルの社会から十分批判されるに値することでありました。マタイにも並行して同じ記事が記されていますが、主の弟子たちのこの母親への対応の仕方が非人間的な扱いであることが良くわかります。当時の偏見的な社会認識がそうさせていることだと思います。

しかし、わが子が重い病に取り掛かり苦しんでいるのに、このような宗教や民族の違いなど考えてゆっくりしていることなどできない。子どもがこの苦しみから癒されるのなら、どんな侮辱的なことをも受け入れられる覚悟がこの母親にはもうできているのです。どんなに力強い勇士さえ勝つことのできない、母親の強さです。

母親はイエスさまの前に進み出て願いました。

「わたしの娘が病気で苦しんでいます。どうか、あの子の病気を治してください」。

ところが、意外な返事がイエスさまから返ってきました。

「まず、子どもたちに十分食べさせなければならぬ。子どもたちのパンを取って小犬にやってはいけません」。

イエスさまが彼女のことを小犬として退けているのです。これは、訴えている人の全人格を無視するような言葉です。彼女の体に流れていた血が血管から吸い取られるような、どこかへ去ってしまっているような、冷たい言葉でした。

「子どもたちのパンを取って小犬にやってはいけません」。

長い間守ってきたという慣習、また健康な人を中心に作られた社会の常識たるものは、すべての人に当てはまることではありません。今日のこの母親のように、偏見を受ける側にいる人にとって慣習や常識は、いのちを失う武器とさえなりうるからです。

「子どもたちのパンを取って小犬にやってはいけません」。

この一言が彼女に与えた衝撃がどのようなものであったのかは聖書には記されていませんが、彼女のこの後の訴えから、この言葉がどれだけこの母親のこころを

武装させたのか、イエスさまの口から出てきたこの言葉のゆえに自分の命さえ差し出すような強い情熱がわきあがってくるのが彼女の再び挑戦している姿から良くわかります。

「主よ、しかし、食卓の小犬も、子どものパン屑はいただきます」。

……………

そうです。イエスさまが言われるとおおり、わたしは、わたしの娘は小犬に過ぎないものです。まさにそのとおおりです！けれども、主よ、小犬でも食卓から落ちる子どものパン屑くらいはいただくことができるのではないのでしょうか……パン屑でいいのです。それだけあればわたしの娘の病気は治ります！

「それほど言うならよろしい。家に帰りなさい。悪霊はあなたの娘からもう出てしまった。」

今、彼女は、この世でもっとも幸せな母親になりました。目に入れても痛くないほど愛するわが子のいのちが新しく生まれ変わったのです。代わりに、娘の代わりに苦しめることなら代わりに苦しみたいと、苦しんでいる娘の傍らでどうしようもできなかった母親の祈りが、訴えが今イエスさまを通して効かれました。

世間の目を意識することを止めて、周りからは社会的に非常識なことだとさえ言われても、民族間の差別意識や宗教観の違いを超えて、彼女は本当の大切なもの、生きべきいのちを苦しみから新しい方法へ取

り戻すことに、自分自身をかけたのでした。イエスさまの前で訴え、イエスさまを通して一瞬は挫折も味わったけれども、しかし、同じくイエスさまが癒してくださったのです。このことは、イエスさまが彼女のいのちかけの願いにご自分のいのちをかけてくださったということ。民族を超え、宗教を超え、何より今生きているものが新しいいのちを持って積極的に生きられるように、おかれた苦しみから救い出してくださいましたイエスさまは、ユダヤ人の一人の男性ではなく、まことの人間でありながらまことの神さまなのです。いいえ、母親と娘だけではなく、この様子をずっと見ている弟子たちにとっても救われる思いの中で生きられるようにしてくださいました神さまなのです。そして、今、わたしたちがこの物語から自分を照らし合わせて、この物語がわたしの救いの物語となることを導いておられる神さまなのです。

このフェニキアの女性、母親は、以前は砂漠に生きるような人生でした。咲くはずのないところで花を咲かせようと、イエスさまと自分との間にある熱い壁をたたいたのです。周りの熱い視線にも耐えて、イエスさまの前に徹底的に低き者とあり続けることによって、イエスさまを通して、たったこの方のゆえに、死を前にしていた、愛するわが子に新しいいのちが与えられるようになった。

わたしたちは、この女性の姿に自分の姿を重ねることができるでしょう。人には

言えない、人に言ったところでどうにもならないことをかかえて眠れない夜を過ごす私たち。病が、老いが、わたしをこのまま死へ導いてしまうのではないだろうか…このまま、苦しみをかかえたままこの生が終わってしまうのではないだろうか…わたしが、わたしの愛するものが、このまま挫折したまま立ち直らないならどうしよう…迎える日々が不安でどうしようもできない私たち。

しかし、イエスさまは、ご自分の前に進み出て訴えているフェニキアの女性を、彼女のすべてを受け止めてくださいました。彼女の娘の病、彼女の心の中の不安、彼女がいのちをかけて訴えている母親として子どもを愛することなど、主がすべて受け止めてくださったのです。

同じように、わたしたちが抱えている多くの不安や悩み、苦しみを、そのゆえに耐えない祈りのわたしたちの日々を、イエスさま受け止めてくださるのです。いいえ、わたしのこの切なる祈りにイエスさま感動しておられるのです。

わたしもそうですが、人は、健康なときには、いのちに対する考え方も適当です。いつまでも元気でいられるように思っています。しかし、一度健康を崩し、思うままに自分の体が動いていかないことが知らされたとき、そこで自分の限界を感じます。健康であるということ、生きるということがどれだけ大切なことなのかを知られるのです。それは、自分だけではなく、

自分お愛するものを通して同じです。

望を私たちにくださっているのです。

わたしは8年前に母親を癌で亡くしました。まさか、鉄人のような母が癌で苦しむとは思っていませんでした。母の傍らで、いくら泣きもがいてもわたしの力ではどうしようもできない、自分の限界を感じました。お任せするしかない、いのちを作られた方に、母のこの終わりをお任せするしかない…どうすることもできないわたしは神さまに任せる祈りをするしかありませんでした。今、わたしは、あのときの、死を迎えている母の傍らでの祈りが神さまに聞かれたと信じています。それは、今、わたしがこうして、自分として歩むことができるからです。生きているからです。

死がわたしたちの生の終わりではない。死がわたしたちの歩みの終着地ではないのです。イエスさまの前で、子どものために訴えて祈るこの母親の切なる求めを通して、わたしたちは、死の向こう側、永遠のいのちへの希望をのぞき見る事ができるのではないのでしょうか。世間のしきたりや宗教がもたらすイデオロギー的なおきな壁などに屈伏することなく、イエスさまの前で徹底的に自分を崩しているからです。この方こそ、死に打ち勝ち、死を支配し、死を超えて復活のいのちを生きる方であることを、彼女の訴えは私たちに教えてくれるのです。彼女の徹底的に自分を崩しながらこの方にしがみつく振る舞いを通して、たった唯一、主、イエス・キリストを通して流れる永遠のいのちへの希

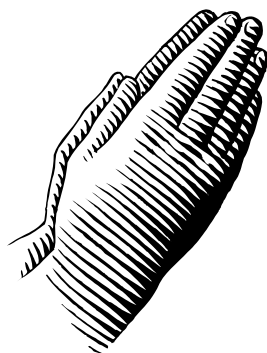
この世で力あるもの、目に見えてそれらしく見えるものは、この世での生だけが大切なものとしてしまいます。死が終わりだから、この世で勝ち取った人生だけが成功した人生であると語り聞かせるのです。死の向こう側、いいえ、今も死に勝ち取って生きる本当のいのち、永遠のいのちの延長線上に自分が生きていることを見る人は、たとえ自分が小犬のような扱いを受けても、そこでめげた歩みをしないのです。自分に与えられているいのちが死から甦った方によって与えられたいのちであることを知らされる人は、いかなるときにもいのちに対して絶望しません。絶望しても直ちに立ち直るのです。命を与えてくださる方が日々の自分の歩みの源となってくくださっていると信じるからです。

主が、今、多くのことを抱えているわたしの人生に介入してくださるということ。この方がわたしと関わってくくださるとき、わたしの心は砂漠のように枯れ果て、病で苦しむ、愛する者のためにたいしたことなどできない者であるけれど、しかし、主が介入してくくださるがゆえに、私たちは新しいいのちの延長線上に在るということ、今週も忘れずに生きようではありませんか。主が咲くはずのない砂漠のただ中で咲いてくださったために、わたしも、砂漠のようなわたしの人生も、新しいいのちの持ち主である復活の主のゆえに花が咲くのですから。

祈ります。

私たちのいのちの源でおられる神さま、あらゆる苦しみに出会わされるときに、私たちは自分たちの力で何とかしようとがんばって、それがうまくいかなかったらおかれた状況を嘆いてみたり、他者のせいにして、苦しみから逃れようとしてしまうときが多くあります。しかし、今日、病に伏している子どものために、イエスさまの前で切に新しいいのちを求めているこの女性の姿を通して、私たちの苦しみをイエスさまに持っていけばいいんだ、ということがわかりました。イエスさまだけが私たちの置かれた苦しみを解決してくださり、たとえ、私たちが苦しみのただ中にお

かれているとしても、その中から新しいいのち、永遠のいのちを望み見て生きることができることを知らされました。わたしの苦しみと向き合ってくださいイエスさまがおられる。世間の目やこの世のしきりなど意識して、自由に行動できなかったわたしをイエスさまに向かい合わせてくださったことを、心から感謝します。今週、また、私たちは苦しみにあっている人たちに出会いながら生きることでしょう。その人たちに、今わたしたちがいただいた喜びを伝えながら生きる者として用いてください。神さまの福音を、祝福を隣人と分かち合いながら生きる者としてここから遣わせてください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。



水曜夕礼拝聖書のみことば

詩編 1 編

いかに幸いなことか。神に逆らう者の計らいに従って歩まず、罪ある者の道にとどまらず、傲慢な者と共に座らず、主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人。その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡りれば実を結び、葉もしおれることがない。その人のすることはすべて、繁栄をもたらす。神に逆らう者はそうではない。彼は風に吹き飛ばされるもみ殻。神に逆らう者は裁きに堪えず、罪ある者は神に従う人の集いに堪えない。神に従う人の道を主は知っていてくださる。神に逆らう者の道は滅びに至る。」

『幸いな人』

この詩編第1篇では二つのタイプの間が対照的に捉えられています。一つのタイプは神さまの教えに従う人のことで、もう片方のタイプは神さまの教えに従わない人のことです。神さまの教えに従う人は幸いな人として語られますが、神さまの教えに従わない人は罪ある者として語られています。幸いな人とは傲慢な者とともに座らない人、主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人のこと。この人は、まるで水のほとりに植えられた木のようにあって、ときが巡りれば実を結び、葉もしおれることがない人のことです。

けれども、神さまに逆らう人は風に吹き飛ばされるもみ殻であって、神さまの裁きに堪えることもできなければ幸いな人たちの群れの中に集うことに堪えることもできない人であると言われます。

この二つのタイプの人のどちらに皆さんとわたしは所属しているのでしょうか。

このように聖書はすぐ幸いな人と悪人を分けていますけれども、しかし、わたし

たちの日々の歩みを考えますとき、自分が時には幸いな人のような場合もあるけれども、しかし時には悪事を計るような、罪ある者の座に座しているときも少なくない、そんな自分がいることを知らされたりするのです。

そう考えるとき、もしかしたらわたしは悪事を計る罪人の群れにいるときが多いのではないだろうか。自分は、やはりもみ殻のように風に吹き飛ばされるような存在でしかないのではないだろうか…がっかりした思いにもさせられるのです。

いかに幸いなことか、神に逆らう者の計らいに従って歩まず、罪ある者の道にとどまらず、傲慢な者とともに座らず、主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人は、いかに幸いなことか。このような人たちの群れから自分をはるかに離れているような存在でしかないのかも…

キリスト者たちが集まったところでよく祈られる祈りの一つに主の祈りがあります。主の祈りの中の一節をご紹介します

と思いますが、「わたしたちを試みにあわせず、悪からお救いください」と祈る節です

主の祈りのこの一節の中に含まれている意味は、わたしたちがそれだけ誘惑に、試みに陥りやすい者であるから、罪を計らい傲慢な者の座に座りやすい者であるから、だからそうならないようにしてくださいと祈りなさいとイエスさまが教えてくださった祈りでしょう。

この世の中でそれらしく見えるもの、思えるものはすべてわたしたちの心を惑わします。お金も権力も名誉も誉れも、美しさもすべて、目に見えてそれらしきものにわたしたちは惑わされ、それらのものを手に入れようとがんばったりするのです。わたしたちが試みに合うのは、このようなものを手に入れようと、欲を張って、必要以上のものを自分のものにしようとするとき、その時、わたしたちは試みにあうのです。

そんなとき、わたしたちは自分にある力を試そうとして、自分にあるものを頼りにしようとしています。自分の力を頼りに生きようとするのです。ある種の冒険をしたり、または地位争いや成績争い、または知識争いなどを通して戦うことによって、自分の力を試そうとするのです。ところが、そんなときにわたしたちは大切なことを失い、自分から最も大切なものを手放ししていることには気づかないのです。わたしたちは、死の向こう側にある永遠のいのちを知ることから離れて、死がわたしにとって最

後の執着地であって、死へ至るまでのこの世でのいのちだけが勝ち取られた生であると考えなのです。死を最後の執着地とする歩みは、自分の実力、自分の力を試す冒険や戦いを重ねることを促していきますし、自分を力を大きくし、それにだけ頼って生きることを勧めるのです。このような、自分の力に頼ってのみ生きようとする歩みの中では、「わたしたちを試みに合わせないで悪からお救いください」と祈ることの意味を知ることは難しいのでしょう。

またときに、わたしたちは倫理的に正しく生きようと、倫理感覚の中で物事を判断したりもします。たとえば、試練に会わされ、苦しくてどうしようもないときに、自分がこの苦しみを通して本物へ近づいていくための試練であると考えたり、人のことを善人か悪人かを区別し、善人は悪人がいるからこそ善人でありうるのだと考えたりするのです。このような思いの中には、善人が善人であり続けるために悪人が現れることを願うこともあるでしょう。

これはわたしたちが注意をはらわなければならないことですが、ともするとわたしたちはこの倫理的な人の生き方に引かれて、倫理的な人間としての歩みがまるで神さまが望んでおられる歩みであるかのように理解してしまいがちですから、注意しなければなりません。

「わたしたちを試みに合わせないで、悪からお救いください」と祈るこの祈りの意味は、自分の力を試すための祈りでもな

ければ、自分が倫理感覚の中で善とはなんだろう、悪とはなんだろうと、それらを区別しながら歩めるように導く祈りでもありません。この祈りが指し示しているのは、むしろ、わたしたちが自分の力で生きようとする、わたしが善と悪を判断しようとする、それが試みに陥っていることだということを示しているのです。

「わたしたちを試みに合わせないで、悪からお救いください」と祈る人は、誘惑とは、わたしがわたしらしくいることを許さないもの、わたしが隣人と一緒に生きることを妨げるもの、愛する者と一緒に生きることも妨げ、神さまからわたしを離していくものであることを知る人のことなのです。つまり、わたしを孤立させ、わたしが死の前で恐怖感のゆえに震えて、この世で勝ち取る人生だけが成功した人生であるから、死ぬまで勝ち取った人生を作り上げていくのを止めて、死が最後であるかのような生き方を避けようとする人の祈りなのです。つまり、**「わたしたちを試みに合わせず、悪からお救いください」**と祈る人は、死の向こう側を見ることができ、今自分が永遠のいのちの延長線上にあることを知る人、この人は幸いな人であり、その人は流れのほとりに植えられた木であって、時が巡れば実を結び、葉もしおれることがない人のことなのです。

つまり、自分の生活の中で自分が決めた原則から物事を判断するのではなく、生きておられ、毎日私たちに新しいいのちを

注いで、働いておられる神さまの側から物事を見て判断することができる人のことなのです。昼と夜を作られた神さまが、わたしたちに時に適った働きをなさい、渇きのときや満ち足りたときを与え、風を起こしたり、安らかな日々を与えたり、心配や不安なときを与えたり、また喜びのときを与えたり、この世に生きるわたしの歩みのすべてを知っていてくださり、導いておられる方の側から物事を判断する人、この人が幸いな人であること。聖書がわたしたちに示している幸いな人なのです。

幸いな人、流れのほとりに植えられた木が、その木自身が、自分の人生、自分の歩み、自分の成長振りを決めたりすることができるでしょうか。木が、自らの力で実を結び、葉もしおれないように保つことができるでしょうか。枝を伸ばしたいところや伸ばしたくないところを自分で決め、根や幹や枝まで栄養を補給し、成長させることができるでしょうか。成長させてくれるものがなければ、木自らの力でどうやって時に適った実りができるでしょうか。自分の持っている倫理感覚の中で善と悪を区別できたとしても、この世のすべてのものを洞察することができたとしても、死に打ち勝って新しいいのちを自ら保つことはできないのです。自らの力で永遠のいのちに生きることは難しいのです。

幸いな人。その人の根っこは流れのほとりに植えられているのです。常に流れる水が絶えないところに植えられていて、そ

の流れる水のゆえに時に適って実を結ぶことができ、葉もしおれずに保つこともできるということ。

わたしたちはキリストのほとりに植えられた一本一本の木です。キリストと言う永遠のいのちのほとりに植えられた大切な木なのです。キリストと言うみことばのほとりに植えられた幸いな者なのです。

時に、自分の力で何とか人生を営んで生きようとしてがんばることもあるけれど、倫理的な感覚の中で善や悪を区別しながら、悪人でいなくてよかったと自己の正しさの中に生きてしまうときもあるけれども、しかし、そんなわたしが、今、キリストという永遠のいのちの木につながっているということ。ありのままのわたしが、永遠の水のほとりに植えられているということ。ですからわたしは幸いな人なのです。風に吹かれたり荒波にさらされたり、悩みや不安に追われるときもあるけれども、わたしを流れのほとりに植えてくださった方がわたしに吹いてくるあらゆる不安や悩みを受け止めてくださり、ともにいてくださるのですから、わたしはわたしらしく生きられるのです。たとえ死を前にした苦しみのただ中でも、喜びの時が必ず訪れることを信じる希望が与えられるのです。

わたしたち一人ひとは幸いな人なのです。今日はじめて神さまのことを聞いている方も一生涯を通して聞いてこられた方も、イエス・キリストの木に結ばれている者として幸いな人なのです。幸いであるこ

のわたしを、神さまは、この夜、どのように用いようとしておられるのだろう？わたしを通して何をなさろうとしておられるのだろう？新しい明日にはこのわたしをどのように用いられるのだろう？常に神さまの側から、永遠のいのちをくださる方の側から自分を見て、これからこのわたしを通して働かれる神さまの働きを楽しみにしてみましょう。わたしの人生にどのような展開が訪れるかを、希望見ていきましょう。キリストのほとりに植えられたわたしは、神さまの働きの業の器として必ず用いられることを信じる幸いな人ですから、主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ幸いな者でありますから、時に適った実りが与えられることを信じて、今晚もここからともに遣わされていこうではありませんか。

祈ります。

神さま、あなたはいつも私たちをご自分おほとりへと招いておられます。いつでも来て飲みなさいと、大きな心を開いて私たちを待っておられるのです。そんなことを知らないわたしたちは自分勝手に自分がただしいと思う道へ進んでしまいます。どうか、そんなわたしたちをこれからもあなたの愛へ、永遠のいのちが流れるほとりへ導いてください。愛の泉のほとりへと私たちを常に導いておられる主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。

【礼拝予定】

【主日礼拝】 毎週日曜日 朝 10 時 30 分～

10月1日(日) 聖霊降臨後第 17 主日 聖書：エレミヤ記 11:18-20・やこぶの手紙 4:1-10・マルコ 9:30-37 主 題：先の者が後になり… 讃美歌 388(教会)/394(教会)/349(教会)
10月8日(日) 聖霊降臨後第 18 主日 聖書：民数記 11:24-30・ヤコブの手紙 4:13-5:8・マルコ 9:38-50 主 題：塩漬けされてこそ 讃美歌 298(教会)/276(教団)/456(教会)
10月15日(日) 聖霊降臨後第 19 主日 聖書：創世記 2:18-24・ヘブル人への手紙 2:5-9・マルコ 10:1-16 主題：子どもたちの神の国 讃美歌 338(教会 1.2.4)/121(教団)/410(教会)
10月22日(日) 聖霊降臨後第 20 主日 聖書：アモス 5:6-15・ヘブル人への手紙 3:1-6・マルコ 10:17-31 主題：あなたに欠けているものが一つある 讃美歌 157(教会 1.3.5)/391(教団)/396(教会)
10月29日(日) 宗教改革主日 聖書：列王記下 22:8-20・ガラテヤ書 5:1-6・ヨハネ 2:13-22 主題：我が心の神殿を壊して 讃美歌 184(教会)/393(教会)/267(教団)

【水曜礼拝】 毎週水曜日 午後 7 時～

10月4日 第一水曜日 聖書：詩篇 5 編 主 題：朝ごとに主を仰ぐ者 讃美：156(賛美歌第二編)/グロリア、グロリア/み手の中で/日の昇る所から
10月11日(水) 第二水曜日 聖書：詩編 6 編 主 題：主にこそ、立ち帰る 讃美：鹿のように/33(子ども賛美歌)/160(賛美歌第二編)/171(賛美歌第二編)
10月18日(水) 第三水曜日 聖書：詩篇 7 編 主 題：主こそ^{ただ}義しい方 讃美：496(賛美歌 21)/33(子ども賛美歌)/160(賛美歌第二編)/114(子ども賛美歌)
10月25日(水) 第四水曜日 聖書：詩篇 8 編 主 題：人間は何ものなので 讃美：424(教会)/鹿のように/563(賛美歌 21)/34(子ども賛美歌)

(説教主題は今のところの予定です。変更になる場合もあります。)

【その他の集会】 第三日曜日 12 時 30 分～ 聖書をやさしく学ぶ会(10 月は第 5 週)
 随時(希望にあわせて)キリスト教入門講座・面談など
 どの集会もどなたでもご参加いただけます。お待ちしております。